

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発・実施支援事業報告書

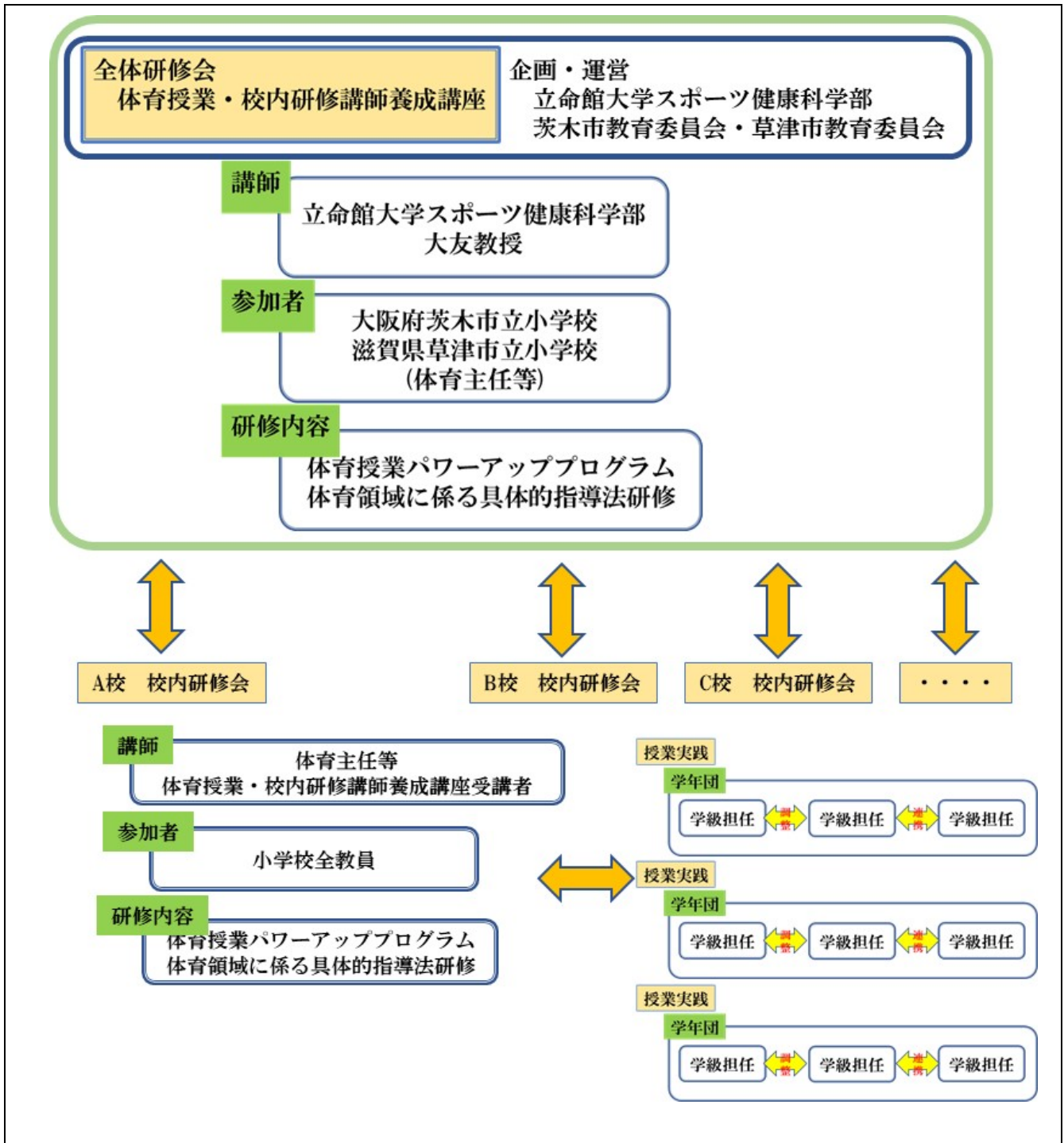
プログラム名	校内研修活性化を図る研修体系の在り方に関する研究 -小学校体育科における授業実践力向上研修プログラム開発に関して-
プログラムの特徴	<p>教員は資質能力の向上のために絶えず研究と修養に励まなければならないが、教育課題多様化に伴う忙しさから学校内での授業に関する指導技術等の伝達が十分に出来ていない現状がある。学校単位で考えると、熟練した教員が経験年数の少ない教員に対して「教授技術」の伝達を行い教育水準の維持向上を行ってきた経緯があるが、教員年齢構成の不均衡により中間層が極端に少ない現在、日々の教育活動の中で教授技術の伝達が十分に行えているとは言い難い。そのような中、各校の教員が課題を明確にして研修する「校内研修」は重要な研修であると言える。</p> <p>体育科においては、小学校1年生から6年生まで、各学年90～105時間程度の授業時間数が配当されているが、学習指導要領に示された学習内容を児童に効果的に指導するためには、体育授業の中で大切にしなければならない基本的事項を熟知し、児童の現状に即した学習内容を展開する指導力が求められる。</p> <p>このプログラムの目的は、1)小学校体育科における授業実践向上研修プログラムの開発を行い、教育委員会単位で管内学校から代表者を招集して研修を受講させ、その代表者を「研修講師」として養成すること。2)研修講師がそれぞれの学校で校内研修を開催して、研修内容を全教員に対して伝達講習を行うこと。3)各教員は研修内容を理解し体育授業を実践することである。</p>

平成31年3月

機関名 学校法人立命館
連携先 滋賀県草津市教育委員会
大阪府茨木市教育委員会

プログラムの全体概要

- (1) 立命館大学スポーツ健康科学部と滋賀県草津市・大阪府茨木市の教育委員会が協働して、管内市立小学校教員に対する体育科授業指導に関する研修を実施して、各校1名以上の研修講師を育成する。
- (2) 研修講師が自校へ戻り「校内研修」を開催して、校内全教員に対して体育科授業に関する研修を実施する。
- (3) 「校内研修」を受講した教員が体育授業を実施して、学習成果の確認と研修の効果を検証する。



1 開発の目的・方法・組織

(1) 開発の目的

教員は資質能力の向上のために絶えず研究と修養に励まなければならないが、教育課題多様化に伴う忙しさから学校内での授業に関する指導技術等の伝達が十分に出来ていない現状がある。学校単位で考えると、熟練した教員が経験年数の少ない教員に対して「教授技術」の伝達を行い教育水準の維持向上を行ってきた経緯があるが、教員年齢構成の不均衡により中間層が極端に少ない現在、日々の教育活動の中で教授技術の伝達が十分に行えているとは言い難い。そのような中、各校の教員が課題を明確にして教員全員で研修する「校内研修」は重要な研修であると言える。

新学習指導要領では、小学校体育科においては、1年生 102 時間、2～4 年生 105 時間、5,6 年生 90 時間の授業時間数が配当されているが、示された学習内容を児童に効果的に指導するためには、体育授業の中で大切にしなければならない指導に関する基本的な事項を熟知し、児童の現状に即した指導をする事が求められる。

小学校教員養成段階では、小学校で指導する全教科を履修することになるが、体育科に関する履修単位は少なく、養成段階において体育授業についてその指導に関する基本的な事項を十分に理解するには学習経験が少ない。教員として採用された後、学校現場の日々の実践を通じて指導上の課題を見つけ改善に取り組む事となるが、小学校教員すべてが体育科を中心として研修をしているわけではない。体育科は、教科書として指導すべき内容及び方法が示されており、そのため教員の中には体育授業の指導に対して苦手意識を持っている者が少なくなく、日々の指導に対して不安を抱えて指導をしている現状が見られる。その教員の指導に関する不安を解消するためには、体育授業のポイントと教師の実践的知識(具体的な指導のあり方)について研修することが必要である。しかしながら、数多くある小学校を研究者(大学教員等)が一校一校指導する事は物理的に困難である。

このプログラムの開発目的は、大学と市教育委員会が連携することにより、管内全ての小学校から代表者を招聘し、「研修講師」として育成を行い、それぞれの学校の全教員に対して体育科指導技術のポイントを共通理解させる「校内研修」を充実させることである。

その過程は、1)小学校体育科における授業実践向上研修プログラムの開発を行い、教育委員会単位で管内学校から代表者を招集して研修を受講させ、その代表者を「研修講師」として養成すること。2)研修講師がそれぞれの学校で校内研修を開催して、研修内容を全教員に対して伝達講習を行うこと。3)各教員は研修内容を理解し体育授業を実践することである。

(2) 開発の方法

体育授業に関する効果的な指導の在り方については、これまで多くの研究者により研究がなされ、学校現場においても多くの実践がある。開発者はこれらの実践を調査研究を行い、小学校体育授業の効果的な指導の在り方について研究を続けてきた。その成果を多くの学校現場において検証を重ね、体育授業の中で教師のどのような活動が児童に良い影響を及ぼすのかを明らかにしてきた。

この成果をより多くの学校現場の教員に浸透させるためには、直接学校を管轄する市教育委員会と連携をして、各学校から代表者となる教員を研修に参加させて「研修講師」として育成を行い、その教員が自校に戻り校内研修を行うことにより、研修内容が管内全ての教員に浸透するのではないかと考えた。

開発の方法としては、1)大学教員と市教育委員会において体育研修を担当する職員で研修の在り方を協議し、市内全校の全教員に研修内容が伝達される仕組みを協議する。2)各校から代表となる教員を市教育委員会が招集して「研修講師」育成研修会を実施する。3)研修講師が自校に戻り校内研修を実施する。4)各校それぞれの教員が授業を実施し、児童の学習成果等を検証する。以上の過程において学習成果を分析して効果的な研修の在り方を開発する事とした。

(3) 開発組織

次の表に示す構成員により事業を進めてきた。大学側はスポーツ健康科学部の大友教授が中心となり、プログラム開発及び研修を開催した。草津市は市教委スポーツ保健課、茨木市は市教委学校教育推進課が開発を進めてきた。

No	所属・職名	氏名	担当
1	立命館大学スポーツ健康科学部・教授・学部長	大友 智	プロジェクトの総括、研修プログラムの開発及び研修実施
2	立命館大学スポーツ健康科学部・准教授	上田 憲嗣	研修プログラム開発、研修プログラムの評価
3	学校法人立命館附属校教育研究研修センター・センター長	友草 司	研修プログラム開発、研修プログラムの評価
4	滋賀県草津市教育委員会スポーツ保健課・主査	谷口 弦太	研修プログラムの計画、研修実施
5	大阪府茨木市教育委員会学校教育推進課・指導主事	大池 輝暢	研修プログラムの計画、研修実施

2 開発の実際とその成果

(1) 体育授業・校内研修講師養成講座

①研修の背景やねらい

小学校教員は、養成段階で体育科についての履修時間が少なく、十分な指導法を身に付けて教員として採用されているとは言い難い。教員として採用され、学校現場の実践を通じて、自己の指導課題を見つけ改善に取り組む事となるが、小学校教員すべてが体育科を中心として研修をしているわけではない。また、体育科は教科書として指導すべき内容及び方法が示されておらず、そのため教員の中には体育授業の指導に対して苦手意識を持っている者が少なくなく、日々の指導に対して不安を抱えて指導をしている現状が見られる。その教員の指導に関する不安を解消するためには、日々体育授業を実践するすべての教員が体育授業のポイントと教師の実践的知識(具体的な指導のあり方)について理解することが必要である。

教員研修については、1)国及び都道府県教育委員会が主催する場合、2)市町村教育委員会が主催する場合、3)各学校が「校内研修」として実施する場合、4)任意の研究団体が主催する場合が考えられる。国及び都道府県教育委員会が主催する場合は、学校全体に対して喫緊の課題改善が必要とされた場合が多く、各学校教育活動において必要不可欠の研修ではあるが、日々の授業力向上に直接結びつくものは少ない。任意の研究団体が主催する場合、その対象が教育活動の一部を対象とした内容が多く、その研修に興味関心のある教員が参加する場合が多く、学校全体の教育力向上へと必ずしも繋がらない。

市町村教育委員会が主催する場合、管内の全ての学校が対象となり、管内の教育課題に対して直接的なアプローチが可能である。また、参加対象教員も意図的に選抜することが可能であり、各学校の教育力向上に直接的な影響力がある。この研修を管内全教員に浸透させるためには、本研修参加教員が研修講師となり、自校の全教員に対して正確に伝達することが求められる。

②対象、人数、期間、会場、日程、講師

【茨木市教育委員会】

対象	茨木市立公立小学校・体育主任等
人数	30名<14校> ・春日小学校・春日丘小学校・中条小学校・玉櫛小学校・玉島小学校・福井小学校・水尾小学校・葦原小学校・郡小学校・耳原小学校・東奈良小学校・西小学校・西河原小学校・彩都西小学校
会場	茨木市立中条小学校
日程	平成30年8月3日(金) 15:00~17:00
講師	立命館大学スポーツ健康科学部 教授 大友 智

【草津市教育委員会】

対象	草津市立公立小学校・体育主任等
人数	4名<4校> ・老上小学校・老上西小学校教員・山田小学校教員・笠縫小学校教員
会場	立命館大学 インテグレーションコア(アカデミックラウンジ)
日程	平成30年12月25日(火) 11:30~13:00
講師	立命館大学スポーツ健康科学部 教授 大友 智

③各研修項目の配置の考え方(何をどの程度配置すべきと考えたか)

1) 体育授業パワーアッププログラム研修

小学校において45分の授業を進めるにあたり、「授業のはじめ」「授業のなか」「授業のおわり」にそれぞれ必要不可欠なポイントを理解し、毎時間の授業で抜かりなく実践する事の必要性について確認することが大切である。例えば、時間管理、安全確認、学習内容の確認、運動量の確保、考えたことの共有など授業における重要な部分の確認を行った。



2) 教師の実践的知識(具体的な指導の在り方)の確認

実践的知識(具体的な指導のあり方)について、授業開始から終了まで、授業の流れに沿って確認することが必要である。実践的知識として、1)授業に勢いをつくる 2)生徒一人ひとりに対する具体的な言葉がけをする 3)学習活動の高まりをクラスで共有する 4)体育を学習活動として捉える姿勢や積極的な姿勢をつくる事を具体的な実践として体育授業の中に取り入れる事の重要性を理解させる。



2) 体育実践に係る具体的指導研修

今回の研修では指導領域を絞り、茨木市教育委員会は「球技」、草津市教育委員会は「体づくり運動・長距離走」とした。

研修で活用した資料は、立命館大学スポーツ健康科学部の大友教授が作成・監修した、群馬県小学校体育研究会の資料を使用し、本研修に参加する全教員が手に取って書き込みが出来るように冊子として各教員に配布した。研修参加者を低学年・中学年・高学年に分け、それぞれ対象学年用の教材を解釈して45分間の授業の進め方を理解する。また、実際に教具を活用し

て児童に対する指導の確認を行い、併せて自校教員への伝達事項についての確認を行った。

(3) 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
体育授業パワーアッププログラム	1	体育授業に関する教師の指導の在り方について知る	<ul style="list-style-type: none"> ・内容⇒体育授業のポイント、教師の実践的知識の獲得 ・実施形態⇒一斉、班別学習 ・使用教材⇒自主教材(パワーポイント等) ・進め方の留意事項⇒受講者が日々の実践を振り返り、ディスカッションを積極的に行う
体育実践に係る具体的指導	1	体育実践に係る具体的指導研修	<ul style="list-style-type: none"> ・内容⇒各種目の指導方法について理解する ・実施形態⇒班別学習(低学年・中学年・高学年) ・使用教材⇒群馬県小学校体育研究会作成資料を印刷して冊子として配布し活用した ・進め方の留意事項⇒受講者がそれぞれの運動教材に対して実際に運動をして指導法を理解する

(4) 実施上の留意事項

研修参加者が自校へ戻り校内研修の講師となるために、教員に対する指導法を伝達することが求められる。参加者には、研修講師が使用したパワーポイントを配布して、伝達すべき内容と研修の方法を正確に伝えた。

また研修資料は、群馬県小学校体育研究会が作成した資料(本研修プログラム開発に関わる大友教授監修)を使用し、全教員が手に取って書き込みが出来るように冊子として各教員に配布した。参加者は可能な限り留意事項を冊子に書き込む事を指示し、授業展開で不明な部分については研修中に理解させることにした。

(5) 研修の評価方法、評価結果

研修について、参加者に対してアンケートを実施しており、以下が茨木市の結果である。

【茨木市教育委員会調査】

体育授業力向上研修（立命館大学授業プログラム）参加者アンケート 集約(回答数23人)

1. 本日の研修は楽しかったですか。

(16人) 楽しかった

- ・大切な点を再確認できた。
- ・実践的な内容をたくさん知ることができた。
- ・グループでの話し合いがあったので。
- ・児童の声かけなど改めて気づかされるのがたくさんあった。早速やってみたくなった。
- ・体育の授業での大切にしなければいけないポイントややってみたい教材を知れたから。
- ・球技の活動が具体的で、活動中の児童の様子が想像できたので理解しやすかった。
- ・実践をしてみようと思える内容でとてもためになった。

(7人) まあまあ楽しかった

- ・授業の実践のイメージがわき、おもしろかった。
- ・今日は暑い中で仕方がないが、実際に動く場面も多くあればなおよかった。

(0人) あまり楽しくなかった

(0人) 楽しくなかった

2. 校内研修で本日の内容を伝達するにあたり、理解は深まりましたか。

(4人) 理解が深まり、不安はない

- ・体育授業プログラムは指導計画から準備物や説明の仕方まで細かく載っていてとても分かりやすかった。

(18人) 理解は深まったが、やや不安はある

- ・うまく伝えることができるか不安がある。
- ・資料もいただき、理解が深まったが、一人で参加したので十分に伝達できるか不安。
- ・学校の教職員に理解してもらえるかどうか不安。
- ・ポイントが押さえられるかどうか不安。
- ・日程の確保、時間の短縮、研修の持ち方。
- ・自分自身が実際にやっていないものを伝えるから。パワーポイントはとてもありがたい。
- ・実践してみることに不安はあるが、先輩教員と連携して考えたい。
- ・規模が大きいため伝達後、どのように実践していけばよいか不安を感じたから。
- ・限られた時間の中で効果的に伝達できるように考えて実施していきたい。

(1人) あまり理解できず、やや不安はある

(0人) 理解できず、不安

3. パワーアッププログラムを学び、体育の基礎理論がよく分かりましたか。

(15人) よく分かった

- ・グループ討議をはさんでもらえた。
- ・分かりやすく説明してもらえた。
- ・具体的な言葉がけを教えてもらえた。
- ・授業で大切にすること、具体的な指導内容がよく分かった。
- ・普段何気なく行っている中でも抜けがちなどころが多く、改めて体育で大事にすることを学べてよかった。
- ・声かけの大切さ等、体育好きの児童を増やす理論について大切などころが理解できたと思います。

(8人) 分かった

- ・基本の流れをおさえ直して、何が重要かよく理解できた。
- ・パワーアッププログラムの進め方、授業のポイントが分かった。あとは実践する。

(0人) あまり分からなかった

(0人) 分からなかった

4. 授業プログラム（ボール運動領域）を学び、ボール運動の授業の仕方が分かりましたか。

(16人) よく分かった

- ・資料が分かりやすかった。映像もあったため。
- ・資料、動画があり、授業の仕方が分かりやすかったから。
- ・場の設定が系統的に上がっていくことで準備が減ったり、子どもも活動しやすくなる。

(6人) 分かった

- ・めあてや流れが分かりやすくまとめられていたから。
- ・実際に実践してみて、理解の程度を確かめたいと思った。

(1人) あまり分からなかった

- ・実際に指示や子どもたちを目のあたりにしていないため。

(0人) 分からなかった

(6) 研修実施上の課題

長期休業中に市内全校から体育主任等を招集するために、教育委員会や校長会と研修内容及び日程を調整することが大切である。また、各校での「校内研修」の日程、研修した体育授業単元をいつ、どのように実施するのかについても教育委員会の支援が必要不可欠である。特に、校内研修については、年度当初から各校で計画が決まっているため、体育科の研修を入れるには教育委員会のリーダーシップが欠かせない。

夏期休業中に実技を伴う研修を実施する場合、熱中症予防の観点から長時間運動を取り入れる事が困難であり、実技研修前に資料の読み込みに時間を使う事が効果的だと感じた。

②各小学校における「校内研修」講座

(1) 茨木市立公立小学校実践

(実践校 春日小 30 名、中条小 35 名、玉櫛小 20 名、福井小 15 名、水尾小 20 名、葦原小 25 名、郡小 15 名、耳原小 20 名、東奈良小 15 名、西河原小 10 名、彩都西小 35)

各校では、スケジュール調整や教員の意識の面から、本研修の伝達を校内研として設定することが難しい状況もあったが、茨木市教育委員会から研修指導講師を支援することで、各校で実施することができた。

1) 研修講師による体育授業パワーアッププログラム講座

8月の「校内研修講師養成講座」の研修内容に基づき、立命館大学から提供された研修講師用パワーポイントに沿って体育授業の基礎理論を学び、グループ協議を行うことで、より理解を深めた。その後、低学年・中学年・高学年に分かれ、それぞれ対象学年用の教材を解釈して45分間の授業の進め方を理解する。



2) 実際の授業で活用する教材理解講座

実技研修として、授業プログラム（ボール運動領域）を体育館で実際に行い、教材を低学年・中学年・高学年で共通して準備する良さや、授業プログラムに沿って授業を実施することによる分かりやすさを体感し、教職員の積極的に学ぶ姿勢も見られた。



(2) 草津市立公立小学校実践

1) 研修講師による体育授業パワーアッププログラ講座及び教材理解講座

12月の研修を受けて、各校での校内研修を実施した。スケジュール調整や教員の意識の面から、本研修の伝達を校内研修として設定することが難しい場面もあったが、各校で実施することができた。立命館大学から提供された研修講師用のパワーポイントに沿って、体育の基礎理論を学び、グループ協議を行う事で理解を深めた。

(3) 研修の評価方法、評価結果

研修について、参加者に対してアンケートを実施しており、以下が草津市の結果である。

(1) 草津市教育委員会調査

校内研修参加者アンケート 集約(回答数 59 人)

1. 校内研修を受けて、体育の指導の考え方や具体的な方法について理解できましたか。

(20 人)理解できた

・指導のポイントなど、的確にまとめられていた上、こちらも考えながら聞くことができた。

・昨年度に続き取り組むことで、経験を活かすことができた。

(19人)少し理解できた

(2人)あまり理解できなかった

(0人)理解出来なかった

2. 校内研修を受けて、体育授業の指導力は高まったと思いますか。

(7人)高まったと思う

・指導案等、全学年分をもらえたので、系統的に理解でき、その上でも指導できた。

(27人)少し高まったと思う

・色々な学習の仕方に触れることができた。

(6人)あまり高まらなかった

・子どもたちもいつもの流れに慣れていることもあったので、来年度からしっかり取り組んで指導力を高めていきたい。

(0人)高まらなかったと思う

3. 授業プログラム(持久走領域)の指導を通して、体育の指導の考え方や具体的な方法について、理解できましたか。

(22人)理解できた

・持久走を指導するときに大切なことが分かった。

・教員同士で教材研究を行った。

・ついつい今までの指導方法で固定化しがちだったのが、新しい方法で指導することで、子どもたちも楽しく学習に取り組む姿が見られよかった。

・わかりやすく書かれていて助かった。

・ゲーム感覚で走るという方法は、子どもが楽しく取り組めてよかった。

・冊子にまとめていただいてわかりやすかった。それを読みながら普段の自分の指導と比べて振り返りたい。

・授業の流れだけでなく、ねらいやグループ活動、導入やまとめの方法など、わかりやすかった。

・自らの日々の体育の指導について誤っていないことを再確認できた。

(30人)少し理解できた

・昨年度よりもねらいが明確に持てた。

・新たな指導方法を知ることができた。

・一定のペースで走り続けることは、子どもにとって難しいことだと気付けた。

(6人)あまり理解できなかった

(1人)理解できなかった

研修については、日頃の体育の授業を振り返り、子どもが運動を好きになるポイントを確認することができました。特に、授業に勢いを作るということを意識していくことで、「わかった!」「やってみよう!」「できた!」など、子どもの前向きな姿勢が多く見られました。運動が苦手な児童も、認められるような声掛けも考えて授業を創ることができました。ありがとうございました。

持久走プログラムについては、各学年の系統がよくわかり、高学年で目指す姿を具体的にイメージすることができました。特に、低学年の「移動」する運動遊びは、これまでに「どうすればいいんだろう?」と迷うことが多かったので、とても勉強になりました。本当に、ありがとうございました。

③各小学校における体育授業実践

(1) 茨木市立公立小学校実践

実際に児童への授業プログラムを実施した教職員の声として、「児童の運動への意欲が高まり、運動量を確保することができた。」「児童が段階を追って技能習得ができた。」「教員にとってもボール運動領域の指導が具体的で分かりやすく、取り組みやすかった。」等があり、当初の目的である、「体育授業に関する指導のあり方や実践的知識等について学び、校内に還元する。」「体育授業実践に取り入れ、子どもたちが楽しいと感じる授業改善の一助とする。」は達成できたと考える。

(2) 草津市立公立小学校実践

実際に児童への授業プログラムを実施した教職員の声として、「学年の発達段階に合っていると感じた。」「学級内で意欲的に取り組んでいる児童が多かった。」「全校で統一したものに取り組めたことがよかった。」「持久走で、どのようなことを指導すればよいのか勉強することができ、本当によかった。」「体育がない日も早くやりたいという声が聞こえた。」「単元を通しての指導案や方法まで細かく示してあり、取り組みやすかった。」等があり、当初の目的である、「体育授業に関する指導のあり方や実践的知識等について学び、校内に還元する。」「子どもたちがより楽しいと感じ、かつ持久力の向上にもつながる授業改善の一助とする。」は達成できたと考える。



[体育授業実践後の教員アンケート結果]

1. 授業プログラム（持久走領域）の指導を通して、体育授業の指導力は高まったと思いますか。

(10人) 高まったと思う

- ・今まで持久走で工夫をした学習をしていなかったが、工夫をして実践することができた。
- ・新しい視点で学習に挑む事ができた。
- ・授業のやり方が分かりやすく、今後もやっていきたいと思った。
- ・場の設定など、勉強になる事が多くあった。

(34人) 少し高まったと思う

- ・指導すべきポイントをおさえる事ができた。
- ・それぞれの子ども達に応じて、声をかける事ができた。
- ・目標を一人ひとりに決めさせることで、自分の限界を伸ばすための指導の仕方がわかった。
- ・指導案通りにうまくいくものもあれば、うまくいかないときもあり、声かけなどで工夫しようとする事ができた。

(14人) あまり高まらなかった

- ・指導案に沿って授業をしていった。
- ・特に体育として新しく伝えられる内容がなかった。
- ・普段の体育の授業とあまり変わらなかった。

(1名) 高まらなかった

2. 授業プログラム（持久走領域）に取り組み、児童の運動への意欲が高まったと思いますか。

(21人) 高まったと思う

- ・シャトルランは一人ひとり長さが違うので、次は〇mに取り組みたいと、上の記録を目指したり、自分の力を見極めたりしている子どもが多かった。
- ・声をかけたり、実際にグラフを書いたりしたので、お互いに記録を意識できていた。

- ・持久走が苦手だと言っていた子どもが笑顔で学習に取り組んでいた。
- ・今までとは違う内容で、よりやりたいと思うようになっていた。
- ・鬼遊びにすることで、普段の遊びのレベルアップ版という感じで取り組めた。
- ・体育がない日も「早くやりたい」という声が聞こえた。

(27人) 少し高まったと思う

- ・ラップタイムを「〇秒台にする」と目標を決めてがんばる様子が見られた。
- ・遊びの中でのプログラムだったので、苦手意識なく取り組むことができた。
- ・得意な子どもにとっては、上を目指すことができず、だれてしまっていた。

(5人) あまり高まらなかったと思う

- ・数回の授業内では、あまり成長することができない。

(1人) 高まらなかったと思う

- ・2年生の「つながりラン」は走りにくそうにしている子どもが多く、持久力向上にはつながりにくい。また、子どもの意欲にもつながらなかった。

3. 授業プログラム（持久走領域）に取り組み、児童の技能は向上したと思いますか。

(7人) 向上したと思う

- ・自分で長さが決められること、「にこにこ・ぐったり」など自己評価ができることで、それぞれが無理なく記録を伸ばすことができた。
- ・音楽などもあり、普通に走るより楽しくやることができた。
- ・走り続けられる子が増えた。

(37人) 少し向上したと思う

- ・同じペースで走ろうと意識して取り組む様子が見られた。
- ・同じペースで走る技能は向上した子どもが多かった。
- ・同じペースで走り続けることの大変さを感じ、どうすればよいかを考え走っていた。
- ・短い時間だったので、もっと走りたいと思う子どもがたくさんいた。
- ・心肺機能を高めるという点ではよい運動だった。
- ・低位の子どもにとっては、ぴったりのプログラムだが、上位の子どもにとっては、もの足りなさを感じる。
- ・これを継続していけば、もっと安定した走りやスタミナがつくと思う。

(9人) あまり向上しなかったと思う

(0人) 向上しなかったと思う

4. 今回の校内研修への参加及び授業プログラム（持久走領域）による体育授業実践について、あなたはどのように評価しますか。

(18人) 良かったと思う

- ・楽しく持久走ができ、子どもの意欲が高かった。
- ・4分間グラウンドをくるくる走るよりも、子どもたちが「同じペースで走り続ける」ということを意識できたと思う。
- ・学年、学校で共通したものは、色々なとらえ方や考え方があって、意見交流ができた。
- ・色々な指導案も見ることができ、今後の参考になった。
- ・一つの引き出しを増やせた。
- ・体育の授業はあまりパッケージ化されたものがないので、流れや解説があることで安心して授業ができた。
- ・記録のとり方が複雑で難しい子もいた。

(30人) 少し良かったと思う

- ・難しい部分もたくさんあったが、子どもたちが意欲的に取り組んでいた。

- ・持久走が苦手な子どもでもがんばってみようかなと思えるプログラムだった。
- ・マラソンのような持久走ではなく、子どもたちの意欲が高まった。
- ・得意な子どもがもっと上を目指せる内容もあるとなお良いと思う。
- ・学年の発達段階に合っていると感じた。

(5人) あまり良くなかったと思う

- ・しっぽとり鬼の実践は良かった。全員の活動量が保障される。「つながりラン」はねらい通りにいかない。
- ・周りの友達の声援でさらに高めてがんばれる感じではなかった。
- ・用具の用意や高学年と運動場を共有しているため、プログラムができなかった。

(1人) 良くなかったと思う

5. 今回の校内研修への参加及び授業プログラム(持久走領域)による体育授業実践についての意見等

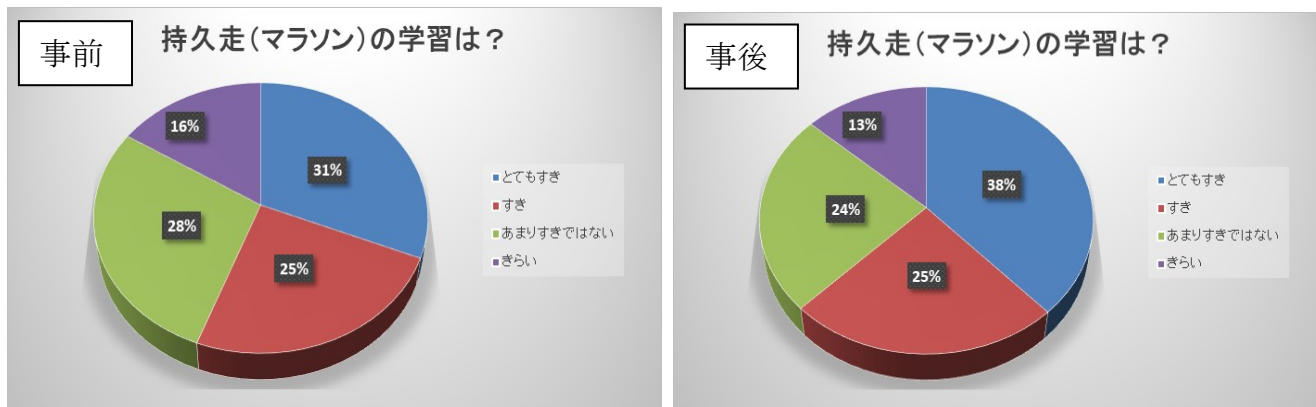
- 低学年のプログラムでは、子どもたちのいきいきした姿が見られてよかった。
- 体育が苦手な教師も得意な教師も授業を考えるよい機会になった。
- 1・2・3…とCDを流すやり方は、ラップタイムが計算しやすいのでとてもよかった。
- 自分のペースを知ることは、生涯にわたってスポーツに親しみを持つために有効であると思った。
- 手探りという部分もあったが、学校をあげての取組ができる機会はとてもよかった。
- 教師自身も学習の進め方や単元計画など自身の引き出しを増やすことができ、大きな学びとなった。
- 持久走の単元に対する見方や考え方を変えることができたよい機会であった。
- 準備等で難しさを感じる部分はあったが、普段とは違った持久走の学習スタイルに子どもたちはやる気を出していた。
- ▲週1しか運動場を確保することができず、設備面での課題があった。準備は今回体育部で行った。
- ▲セイムゴール走は、スタート位置が人によって違うことで、混乱してしまう子どもがいた。
- ▲スタート位置を変えるのは難しかったので、同じところからスタートするように変更した。
- ▲4年生のシャトルランの距離、選択の幅がもっとあってもよいかと思った。
- ▲3年生のプログラムは評価をするのがやや難しかったので、今まで通りの3分間走をした。
- ▲2年生の鬼遊びで、一人鬼は逃げる人の止まっている時間が長いため、二人鬼の方がよいと思った。
- ▲指導案の通りにするには、1年生の発達段階には難しい。
- ▲3年生の距離等については見直してもよい。
- ▲1・2・3…のカウントでは、少し気が重くなっていたようにも感じた。
- ▲評価の点のわかりやすさ、やりやすさがもう少しあると授業がしやすい。
- ▲記録カードが複雑で難しいので改善するべきだと思った。
- ▲「1分で○周と○m」や「1周○秒」の方が意識しやすい。
- ▲低学年の準備がたくさんあるのは厳しい。
- ▲運動時間が少なすぎて寒い。
- ▲柔軟にプログラムを応用することが可能なのかどうか迷った。
- ▲どうやって体育に苦手意識のある先生へも広げていくかが重要だと思った。

[体育授業実践前後の児童アンケート結果]

持久走プログラムの前後に1～6年生(1年生:笠縫小、2・4年生:老上西小、3・5年生:山田小、6年生:老上小)へのアンケートを実施した結果、「とても好き」が7%上昇し、「あ

「あまりすぎではない+きらい」が7%低下した。

児童の事後のアンケートでは、「シャトルランに慣れてきたら、嫌いではなくなってきた。」（3年）、「自分のペースを考えながら走ることが楽しい。」（3年）、「どんどん記録が伸びていって楽しい。」（4・5年）「自分の目標を決めて、目標に向かって一生懸命できた。」（5年）「疲れるけれど、その後に記録が上がっていると爽快感がある。」（5・6年）などの回答があった。



3 連携による研修についての考察

(連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等)

今回の実践を通じて、連携を推進・維持するためには、研究組織(大学)と教育委員会が十分に意見交換をする必要があると感じた。また、各学校で授業実践を行う場合は、校長会や体育主任会との連携を深め、研修の目的と予想される成果イメージを共有化することが大切である。

今回、草津市教育委員会と茨木市教育委員会が同じプログラムに参加したが、実践を進めて行く過程において、教育委員会同士が意見交換を行う場面もあり、課題やその改善等についての意見交換ができたと思う。また、「研修講師」には、講座で活用したパワーポイント資料を配布した事と、領域内の運動種目について、全員に冊子として印刷して渡した事が効果的であった。

今後の課題としては、学習指導要領に示されたすべての領域について、今回と同様のプログラムを開発して実践する必要がある。

4 その他

[キーワード] 体育科授業パワーアッププログラム、校内研修講師養成、学年団意見交換

[人数規模]

- A. 10名未満 B. 11～20名 C. 21～50名 **D. 51名以上**
 補足事項 (校内研修=茨木市 240名・草津市 95名)

[研修日数(回数)]

※「受講者が何日間(又は何回)の研修を受講したかを次の記号の中から選ぶこと。補足事項があれば、()内に記入すること。

- A. 1日以内 (1回) **B. 2～3日 (2～3回)** C. 4～10日 (4～10回) D. 11日以上 (11回以上)

【担当者連絡先】

●実施機関 ※実施した大学名又は教育委員会名等を記載すること

実施機関名	学校法人立命館	
所在地	〒604-8520 京都府京都市中京区西ノ京東梅尾町8番地	
事務担当者	所属・職名	立命館大学・スポーツ健康科学部・教授
	氏名（ふりがな）	大友 智 （ おおとも さとし ）
	事務連絡等送付先	〒525-8577 滋賀県草津市野路東一丁目1番1号
	TEL/FAX	077-561-4860
	E-mail	otomo@fc.ritsume.ac.jp

●連携機関 ※共同で実施した機関名を記載すること

連携機関名	草津市教育委員会	
所在地	〒525-8588 滋賀県草津市三丁目13-30	
事務担当者	所属・職名	スポーツ保健課・主査
	氏名（ふりがな）	谷口 弦太 （ たにぐち げんた ）
	事務連絡等送付先	〒525-8588 滋賀県草津市草津三丁目13-30
	TEL/FAX	077-561-2423/077-561-2488
	E-mail	sports@city.kusatsu.lg.jp

●連携機関 ※共同で実施した機関名を記載すること

連携機関名	茨木市教育委員会	
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8-13	
事務担当者	所属・職名	学校教育推進課・指導主事
	氏名（ふりがな）	大池 輝暢 （ おおいけ てるのぶ ）
	事務連絡等送付先	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8-13
	TEL/FAX	072-620-1683
	E-mail	t_ohike@city.ibaraki.lg.jp